

延慶本『平家物語』小宰相入水譚と白袴

——陰画としての『源氏物語』浮舟と『今とりかへばや』の「心強し」——

馬場 淳子

はじめに

これまでの先行研究と稿者の既発表から、本稿の意義を整理して述べておきたい。

まず稿者が白袴を穿く女君に着目したのは『堤中納言物語』所収の「虫めづる姫君」であった。虫を愛玩する風変わりな姫君は、貴族女性が一般的に着用する「紅の袴」ではなく、「白き袴」を愛用する。従来、虫めづる姫君の「白き袴」は男物であり、姫君が男性的なジェンダーの持ち主であるが故の男装だと解釈されてきた。しかし近年では、白袴の女性の着用例から、若い女性にふさわしからぬ、老女のような装いだと分析されている^①。稿者がさらに用例を調査したところ、『長秋記』の令子内親王の尼姿の記事など、白袴は老尼の装いとしてもふさわしいものであり、虫めづる姫君の「白き袴」は、プレテクストとしている『源氏物語』若紫巻の成人前の童女である紫の上だけでなく、性的対象外の女性として紫の上の祖母尼君のイメージを投影させる狙いがあったことを明らかにした^②。

「粉河寺縁起絵巻」の女たちの出家剃髪の場合で、脱ぎ置かれた「紅の袴」が背後に描き込まれるように、「紅の袴」は女の性の象徴であり、反対に老女や尼の「白き袴」は「性的な意味での女であること」をやめた装束の一つと考えられるのである^③。

次いで女君の白袴姿で注目されるのは、本稿で採り上げる『平家物語』小宰相の身投げ場面である。『平家物語』小宰相に関する本文は、古態を残している可能性が高く、かつ叙述の詳細な延慶本で考察するが、身投げの際の袴の色が白であったことは諸本で共通しており、本文中に説明はないものの、表面上は上西門院のお気に入り女房として、「紅の袴の女房より上臈の一種の禁色聴許の高位のもの姿」と理解される^④。しかし延慶本にはないが、たとえば寛一本巻八「太宰府落」では、平家方のすべての女性たちが「紅の袴」を着用しており、それは男性たちの「白き袴」と対比的な、女の身体を表象するものであったにもかかわらず、小宰相の入水場面で身にまとうのは、「白き袴」だと明記することの意味の重さを見逃してはならないだろう。小宰相の入水の装束として、白袴が意図的に選ばれていることが重要なのである。

そもそも女性の袴の色は紅が一般的であることから、単に「袴」とある場合はすなわち「紅の袴」を指すことが自明であり、物語中で女性の袴の色に触れることは稀である。延慶本で「白き袴」は小宰相の一例のみ、それ以外で女性の袴の色が明記されるのは「紅ノ袴」が二例あるだけで、「紅ノ袴」はいずれも男を誘い、惑わせ、誑かそうとする女の装束として、性的な意味での女性性やその罪を強調する意図が窺える用例であった^⑤。また女の穿く「白き袴」についての先行研究によって、尊貴な女性の着用例があり、女房が御所など公の場で白袴を着用するには

特別な許可が必要だったことが分かる用例や、女神や天女・童女が白袴姿で絵画化されることが挙げられるが、それらは男性がおいそれと性的対象としてはならない、不可侵な尊さをあらわす女性の装いといえるだろう。総じて女の穿く「紅の袴」は女の性を喚起するものであり、反対に女の穿く「白き袴」は女の性を隠蔽するものとして機能すると考えられるのである。

本稿では、このような女の穿く「紅の袴」と「白き袴」との対比構造を前提とした上で、浮舟の「紅の袴」を性愛の罪の刻印として描く『源氏物語』浮舟入水譚の反転として、「貞女」と称される『平家物語』小宰相の白袴について考察したい。

一．『源氏物語』浮舟と延慶本『平家物語』小宰相入水譚（一）

同じく女性の入水譚を語るとはいえ、『源氏物語』の浮舟は薫と匂の宮との板挟みに煩悶して入水を決意するものの未遂に終わったのに対し、『平家物語』の小宰相は愛する通盛の戦死に絶望して妊婦でありながらも身投げして亡くなったことは、大きな相違である。しかしながら、延慶本『平家物語』第五本「通盛北方二合初ル事付同北方ノ身投給事」の小宰相入水譚は、『源氏物語』手習巻の浮舟の物語を踏襲しながら叙述されており、浮舟のイメージが点在している。浮舟を小宰相に、薫を通盛に重ね合わせ、その共通項について四重田陽美氏の指摘を稿者なりにまとめれば以下になるだろう。^①

①薫も通盛も重きを置く正妻と同じ屋敷（同じ船）に住むが、浮舟と小宰相は離れた別邸（別の船）で男（夫）の訪れを待つという不安定な身の上であったこと。

②小宰相も浮舟のように、死なずに生き長らえは本不意な結婚（再婚）を強いられる可能性が語られること（二人の男と一人の女の

三角関係が想起されること）。

③浮舟は都の母親への手紙を残して右近たちが寝静まった隙に屋敷から失踪し、小宰相もまた都の家族への手紙を託して乳母子の女房がまどろんだ隙に入水を遂げたこと。

④「浮舟」という名のイメージが、まさに大海の波間をさすらう小宰相の境遇と重なり合うこと。

本稿ではこの他に、小宰相の入水と浮舟の出家の場面において類似の箇所があることを指摘しておきたい。平家の人々と共に都落ちした小宰相は、一の谷での通盛戦死の報を受け、屋島へ向かう船上で身投げを決意する。往生を願って極楽の阿弥陀仏のいる西の方角に向かって合掌・念仏しようとするが、「イツク西トハワカネドモ」と、どこが西かわからないとしながらも、朧月が山の端に入る方角を頼り、「サスガ二只今ヲ限トハ都ニハヨモシラジ」（二八四頁）と、都にいる家族を思つて心を乱す。これは、小野での出家儀式で親の恩に拜する際、母親のいる方角を浮舟が「いづ方とも知らぬほどなむ」（三三八〜三三九頁）と、感極まって泣く場面と響き合うものである。小宰相にしても浮舟にしても、今を最後と敢行される娘の入水や出家について知るよしもない自身の肉親を思い、この決断によってこれまで自分を慈しんでくれた親をどれほど落胆させることになるか、推し量らずにいられないのである。都の親元から遠い場所に連れ出され、流転の果てに、自身の入水や出家という重要な場面において、自分は一体今どこにいるのか、その方角さえおぼつかないという描写は、さすらう女君たちの寄る辺のなさを象徴する一幕といえよう。

また入水した小宰相は一度は引き揚げられるが、その死が確認された後、「故三位ノ鎧ノ一両残りタリケルヲ、浮モゾ上ルトテヲシ巻テ、又海へ返シ入テケリ」（二八五頁）と、亡き通盛の形見の鎧を、千尋の底か

ら浮き上がらない為の重石として着せられ、再び海へと葬られる。「一蓮ノ身トナシ給へ」(二八四頁)という小宰相の最後の祈りに呼応するかのように、通盛の鎧を小宰相の亡骸に身につけさせた甲いの人々もまた、小宰相が通盛の魂に抱かれながら、浄土の岸にたどり着くことを願ったのだらう。だが、死装束としてあたかも人形のように着せられた、女の身にそぐわない夫の鎧は、小宰相の一生がその借り物の「衣」と同様に、思うように自分の人生を生きられなかった、借り物の生涯であったことを暗示しているのではなからうか。

浮舟もまた、女としての人生を終え、御仏の弟子として新たに生き直す重要な出家儀式において、急なことで衣装が間に合わず、「わが御表の衣、袈裟などをことさらばかりとて着せてまつりて」(三三八頁)と、横川の僧都の男物の法衣を着せられていた。周囲の人の善意によるとはいえ、人生、もしくは女としての生涯の終焉を迎えた女君たちに用意されたのは、自分の為の衣装ではなく、女にとって他者性の象徴である男の衣装だったのである。

常に他者の勝手な欲望に翻弄され続けた浮舟のみならず、女房として仕えた上西門院に強要されて通盛と結ばれた小宰相もまた、当人の意志を置き去りにされ、他者の思惑から逃れることのできなかった女君である。三田村雅子氏が宇治十帖以降の、人と衣の関係について、「衣」との一致というよりもむしろ不一致によって、「衣」との距離によって逆にその人物が掴み取られてくる」と述べるように、女の身に似つかわしくない借り物の男(他者)の衣装は、彼女たちのこれまでの人生が借り物であったことを象徴的に総括する証しといえるのではなからうか。

二. 『源氏物語』浮舟と延慶本『平家物語』小宰相入水譚(二)

『源氏物語』における浮舟は、薫と中の君との宿木・東屋巻での対話か

ら、亡き大君の身代わりとしての「人形」であり、罪や穢れをなで移して水に流される被具としての「なでもの」の役割が期待されていた。林田孝和氏は、彼女の詠んだ「浮舟」という言葉そのものが、罪ある人の身代わりとしてその罪穢を引き受ける、上巳の祓で人形を乗せて波間を漂う浮き舟のイメージを連想させると説く。さらに林田氏は、浮舟は薫と匂の宮の「二人の男の罪業を一身に背負って、流れに身を沈めようとする。贖罪の女君」であったといえよう」と述べる。

ちなみに蜻蛉巻で浮舟の死出の旅路に置き去りにされた恨みで慟哭する右近の描写はそのまま、入水に同行させてもらえずに小宰相の死を看取ることとなった乳母子の号哭と相通じる。また同じく蜻蛉巻で、浮舟の失踪を入水と判断できる事情について、浮舟の母・中将の君に告白する浮舟付きの女房の、「行く方も知らぬ大海の原にこそおはしましにけめ」(二二二頁)という推量は、祝詞「六月の晦の大祓」に基づき、かつ仏教的想像力に裏打ちされるイメージとはいえ、まさに大海原を漂う小宰相を語るに相応しい情景なのである。

『贖罪の女君』としての浮舟を踏まえて『平家物語』小宰相入水譚を読み解くならば、戦闘で殺生をおこなっていたであろう通盛の鎧を「人形」のように着せられた小宰相もまた、通盛の罪業をその身に背負った贖物として海に流されたといえよう。

通盛が「天下第一ノ美人」(二七四頁)との世評の高かった小宰相を見初めたきっかけは、上西門院の花見の行啓であった。通盛との縁がなければ見知らぬ西海へ流離する憂き目を見ることもなかったはずだった小宰相は、宿命的な悲恋の始まりとなった、同じく桜を背景とした『源氏物語』の出会いについて、「彼ノ源氏ノ大将ノ臘月夜ノ内侍ノカミ、紅微殿ノホソ殿モ、我身ノ上トオホユルゾ」(二八三頁)と、自分の境遇を重ね合わせる。つまり、花宴巻での光源氏と臘月夜との紅微殿(正しく

は弘徽殿の細殿での出会いと、それをきっかけに罪なき罪を得て須磨に流されることになった光源氏に、小宰相は我が身をなぞらえるのである。浮舟の物語を取り込んだ小宰相入水譚との関係で注目されるのは、須磨巻で流謫の身となった光源氏もまた、

舟にことごとしき人形のせて流すを見たまふにも、よそへられて、
知らざりし大海の原に流れきてひとかたにやはものは悲しき

(二二七頁)

と、上巳の祓の「人形」を自らによそえた後、罪を濯ぐような暴風雨に襲われたことで禊ぎを済ませ、栄達の糸口となる明石へと導かれていたことである。

なお、小宰相のような妊婦による自死は、胎児をも犠牲にすることに
なり、本来は子殺しの罪に問われるはずだが、この小宰相入水譚では夫の罪科を引き受ける、贖罪の女君のテーマに重きを置いたためか、子殺しの罪は隴化され、小宰相は水による浄化によって、「不_{りやうふに}嫁_に両夫_に」
という「貞女」(二八六頁)に祭り上げられるのである。

小宰相の悲劇には多くの女性が深い同情を寄せたようである、女人救済を目的に制作された『願成寺地藏尊縁起』は、まず小宰相は地藏菩薩の申し子であったとし、『平家物語』の小宰相と通盛の馴れ初めから入水までの概略を記した上で、その後日譚として小宰相の乳母・呉葉による追善供養と、夫婦の石碑の建造を語る。延慶本『平家物語』では、小宰相は乳母ではなく乳母子(覚一本などでは乳母)に対し、自分にもしものことがあれば、「ワラワガ装束ヲバ何ナラム僧ニモトラセテ、衣ニセサセテ、後生ヲモ問ヒ無人ノ菩提ヲモ助給ヘ」(二八二頁)と、自らの装束を布施として自分と通盛の菩提を弔って欲しいと依頼しており、乳母子の出家・受戒まで言及されていた。『願成寺地藏尊縁起』における後日譚では、乳母・呉葉が小宰相の念持仏であった地藏尊を背負い、「姫君いま

ハのきハまてめした(る)袴なともちて」(二五一頁)、願成寺での追善供養を果たしたことを語る。次章で詳述するが、小宰相が今際の際まで身につけていた袴とは、女性の着用例が稀な「白キ袴」であり、「練_ひス_キノ二衣_も」も着用していたはずだが、それには特に触れられない。願成寺に奉納された小宰相の遺品の中でも、白袴は念持仏の地藏尊と並んで尊重されるべき、格別な「貞女」の装束であったことが窺える。

小宰相の入水の際の「白キ袴」は、以後、愛する男の子どもを身籠もりながら死別(もしくは離別)した女君が、白袴姿で命懸けの行動に出る「貞女」の物語として、『義経記』静や彩色絵巻「兎今参り」姫君に継承され、再生産されていくという見通しを持っている。こうした「貞女」としての白袴の系譜については、別稿にて詳らかにしたい。

三、浮舟の「紅の袴」と小宰相の「白キ袴」

浮舟も小宰相も、死に切迫した状況で女性に介抱された際の装束について、袴の色にまで言及されていることは見過ごせない。浮舟の穿く「紅の袴」は女の性による罪を喚起するものであり、反対に小宰相の穿く「白キ袴」は女の性による罪を隠蔽するものとして機能すると考えられ、浮舟と小宰相の対比は明らかである。これまで浮舟の物語をなぞるように語られてきた小宰相入水譚は、ここで浮舟からの鮮やかな反転の姿勢を見せるのである。

【浮舟】

人も寄りつかでぞ棄ておきたりける。いと若うつくしげなる女の、白き綾の衣一襲、紅の袴ぞ着たる、香はいみじうかうばしくて、あてなるけはひ限りなし。(二八六頁)

【小宰相】

白キ袴ニ練_ひス_キノ二衣引マトヒテ、髪ヨリ始テシヲトシテ、

僅(わづか)ニ息バカリチト通給(かよらまほ)ニレドモ、目モ見アケ給ワズ。瞿麦(しほ)ノ露ニソボヌレタル様ニテ、死タル人ナレドモ、ネ人タル人ノヤウニテ、ラウタクゾ見ヘ給ケル。
(二八五頁)

手習巻での浮舟の記憶によると、身投げを決意して宇治の屋敷を出ようとしたところで意識を失い、気が付けば宇治院の大樹の元に座っていた。それを横川の僧都らに見えされ、僧都の妹尼の元に運ばれて保護される場面では、身にまとう装束と共に、前日からの雨に濡れたせいで瀕死の重体となっていた浮舟の美しさが描写される。

入水後に仮死状態で一度は引き揚げられた小宰相もまた、その濡れた身体が装束と共に美しく描写され、乳母子に看取られながら最終的には息を引き取る。『無名草子』で「撫子の露に濡れたるよりもらうたくなつかしかりし御さま」(二〇三頁)と引用されるように、『源氏物語』諸本の中では主に河内本や別本系統にみられる、亡くなった桐壺更衣の面影を桐壺帝が回想する場面で、更衣は「露」らうたし」という表現と共に「撫子(瞿麦)」にたとえられており、小宰相の臨終の描写はこの桐壺巻と重複した表現となっている。ここでは小宰相は浮舟ではなく、身分差の障害を乗り越えながら夫との至上の愛ゆえに儂く散った、桐壺更衣になぞらえられるのである。

延慶本『平家物語』の小宰相は、通盛の求愛を三年間拒んでいたが、主君である上西門院に「アマリ二人ノ心ツヨキモ身ノトガトナル(成)ノモ(余)ノヲ」(二七八頁)と、紺青鬼説話や小野小町説話を引き合いに説得され、通盛を受け入れた経緯があり、男を拒絶する「心強し」という生き方を禁じられた人物である。反対に、薫と匂の宮の欲望を掻き立てたにもかかわらず、どちらも選べずに身投げを決意した浮舟は、二人の男を同時に拒絶したことで、彼らに妄執を抱かせたといえる。そしてその時の浮舟の決意は、「心強く、この世に亡せなむと思ひたち」(二九六頁)

と語られるのである。松村誠一氏は、頼りなく弱々しい浮舟の様子は、失踪前までは人々に「らうたし」という印象を与えていたが、入水未遂を境に「らうたし」は過去のものとなされ、入れ替わるように「心強し」が語られるようになると指摘している。一方、通盛と結ばれる前に「心強し」を封印されて生きることになった小宰相の、眠るように愛らしい亡骸は、桐壺更衣と同じ撫子(瞿麦)の喩と共に「らうたし」と表現されるのである。

四、小宰相と通盛の馴れ初め譚における「心強し」と『今とりかへばや』

延慶本における小宰相と通盛の馴れ初め譚で引用される小町説話は、「昔小野小町ト云ケル者ハ、(略)ソノ道ニハ心ツヨキ名取タリケル」(二七九頁)と、恋の道において男の愛を拒絶するつれない女だという評判が立ち、男の怨恨を負うことによって小町は落魄の憂き目を見たことされており、小町には浮舟と同じ女の罪が科せられ、流離を余儀なくされたことと解される。

反対に、通盛の求愛を「露ナビキゲニオワセズ」という取り付く島もない態度で、「心ツヨゲ」(二七七頁)に拒否していた小宰相だったが、「小町のように心強くあつては不幸になる」と説く上西門院に強要され、二人は結ばれることになった。小宰相は、浮舟や小町のような、男を拒絶する「心強し」という女の生き方を剥奪された代償として、男に妄執を抱かせる女の罪からは解放されている。だが未亡人となった小宰相は、通盛も自分亡き後を「イカナル人ニ見エムズラムト、ソレモ心ウシ」(二八一頁)と憂慮したように、再婚を強いられるであろうことは想像に難くなかった。「心強し」を手放した小宰相は男を拒むことが出来ない以上、命を懸けねば再婚の可能性を潰えさせられなかったのである。

これまで度々問題になってきたように、小宰相が自死によって胎児の命をも奪うといった罪は不問とされ、「貞女」とまで語り手に賞賛されるのは、「不嫁^(一)両夫^(二)」と評されるような夫への愛に殉じただけでなく、最後には通盛の遺品の中で、よりにもよって殺戮をおこなう武士の象徴ともいえる鎧を着せられ、夫の罪業を一身に引き受ける戒具にされるといって、贖罪の女君^(三)としての哀れな犠牲に同情を禁じ得ず、批判に晒すことができなかつたことも一因にあるのではなからうか。『源氏物語』浮舟の物語を下敷きに小宰相入水譚を読むことによつて、「人形」、すなわちスケープゴートとして生きた浮舟を受け継いだ、小宰相の姿が浮き彫りになるのである。

延慶本の「心強し」の用例は全一八例あり、その中でこの小宰相と通盛との馴れ初め譚における「心強し」は四例（通盛一例、小町一例、小宰相二例）と密集しており、「心強し」がキーワードとなることは疑いない。「心強し」は『角川古語大辞典』に拠ると、

①心を強く保っているさま。意志が強くしつかりしているさま。我慢強い。

②気が強く思いやりのないさま。情にほだされなさいさま。つれない。

③頼もしくて安心な気持であるさま。

となつており、男性を拒絶する女性の「心強し」は②に該当する。中田恵理子氏は覚一本の「心強し」の用例を検証し、高木信氏は覚一本をメインにしながらも延慶本の用例にも目を配り、延慶本の傾向を「女性の「心強し」は否定されるが、男性ならば肯定されるのである」と分析する⁽³⁾。また永井久美子氏は、覚一本『平家物語』は『源氏物語』から「心強し」の用法を受容していると読み解く⁽³⁰⁾。「十訓抄」や『古今著聞集』などの小町落魄説話に「心強し」という表現がみられないことから首肯すべき見解だが、『源氏物語』に限定した影響とは認めがたい。『源氏物語』

語』の受容としてわかりやすい例を挙げれば、光源氏の求愛を拒み通した朝顔の姫君を、『無名草子』は「いみじき女」に分類した上で「心強き人」（二九二頁）と規定するが、批判的に扱ってはいないのである。

先に触れた高木氏による用例分析のように、延慶本の「心強し」は男らしさと直結し、男性が備えるべき美質だという言葉がみられる。小宰相を恠い思ふ通盛に対して乳母・六条が「男ハ心強キコソ憑ク候へ」（二七六頁）と叱咤激励する場面だけではなく、第六末「六代御前被召取事」で「高モ卑モ男子計心ツヨキ者コソナカリケレ」（四八六頁）と、成人前の六代が敵方に捕えられても気丈にふるまえるのは身分に関係なく男子だからだ、という意味にも使われており、延慶本において「心強し」は、本来は男性性に属するものだという認識で使用されていることがわかる。

そこで想起されるのは、『今とりかへばや』の「心強し」の用法である。『夜の寢覚』では女としての苦渋の経験と引き替えに獲得した、女主人公の心の成長の証であった「心強し」は、『今とりかへばや』では「男にて馴らひたまへりける名残の心強さ」（三八五頁）のように、男として培った経験に基づく男装の女君の魅力として語られる⁽³¹⁾。

『今とりかへばや』の「心強し」は全五例（四の君一例、男尚侍一例、女中納言三例）あり、いずれも宰相中将やその若君に対する拒絶の能否表現となっている。普通の女である四の君は色好みの宰相中将に「心強からず」（二六三頁）陥落し、社会的には女だが生物学上は男である男尚侍は「心強く」（三〇二頁）彼を退けた。女中納言は、生物学上は女だが男としての社会的経験を持つがゆえの「心強さ」（三八五・三九二・四六七頁）によって、結果として彼らを捨て去ることができたのである。

『今とりかへばや』女中納言の「心強さ」は、性差に関係なく見聞や教育によって、女性がどんな役割でもこなせる可能性を示唆したものであ

ると同時に、逆説的にいえば、男として生きる経験など持てない普通の女は「心強し」を獲得できない、とも解釈できてしまうのである（「心弱し」の用例からも裏付けられる）。延慶本における「心強し」のジェンダー観は、『今とりかへばや』の用法を後者の解釈で受け取り、発展させたものではなからうか。『今とりかへばや』の女中納言は、最終的には男装時代の自分をよく知る帝との関係において、きょうだい交換の秘密を遵守する為には「心強し」を手放し、普通の女を演じて生きざるを得ない状況に追い込まれており、男を拒絶する「心強し」と共に主体性を剥奪された女性として、小宰相の先例となっているのである。

女中納言にしても小宰相にしても、宰相中将や乳母子といった身近な人物が望む、あらまほしい女の生き方への抵抗の結果として、出奔による子捨てや自死による子殺しがある。また、「男にて馴らひたまへりける名残の心強さ」という大義名分のもと、女中納言に肩入れして子捨ての罪を隠蔽しようとする『今とりかへばや』の語りは、同じく「貞女」の名のもとで母として生きることを放棄した、小宰相の子殺しに対する語りの問題とも相通じるのである。

結び

延慶本『平家物語』小宰相入水譚を『源氏物語』浮舟の物語と重ねて読み進めると、小宰相と浮舟がそれぞれ瀕死の状態で保護された場面では、自らの命を捨てようとした背景の相違を際立たせるかのように、浮舟の「紅の袴」は小宰相の「白き袴」の陰画^{ネガ}となっており、二人の対比構造が鮮やかに浮かび上がってくることを論じた。延慶本における『源氏物語』浮舟引用に関しては、単に類似点を拾い上げるだけではなく、少なからず『源氏物語』浮舟論としても通用するよう心掛けたつもりである。『源氏物語』を通して延慶本『平家物語』を解釈すると同時に、延

慶本が『源氏物語』のどの場面を名場面とし、どのような理解の元で再生しようとしたのか、またどのような意図で異化しようとしたのかを考察することは、現代の解釈の地平へと連なる、『源氏物語』の後世の読みの探求でもある。延慶本『平家物語』は、王朝物語史の流れに根ざした鑑賞にも耐えうる豊穡さを有したテキストなのである。

「心強し」の用法のように、延慶本に及ぼしたのである『今とりかへばや』の影響については駆け足の論述となり、十分に言葉を尽くすことができなかつた。天狗たちが特定の団体組織全員の心と入れ替わる第二本「法皇御灌頂事」の憑依表現や、神田龍身氏が類似を指摘する第二末「文覚伊豆国へ被配流事」の法師と男を交換する「天狗ノ法」(四八二頁)^⑤も、『今とりかへばや』の天狗から想を得ている可能性が高いと思われるが、これらについても改めて考察の機会を得たい。

注

- (1) 玉井絵美子「虫めづる姫君」の再検討——姫君の服装を通して——〔花園大学国文学論究〕三二号、二〇〇三年二月、野村倫子「『堤中納言物語』「虫めづる姫君」の世界——「若紫」の反転から——」〔日本語文化研究〕一〇号、二〇〇七年三月。
- (2) 馬場淳子「『堤中納言物語』「虫めづる姫君」の「白き袴」——対極としての「蝶めづる姫君」と近似する『今とりかへばや』の男装——」〔全国大学国語国文学会口頭発表・令和四年度冬季大会、二〇二二年二月四日、於京都女子大学〕。なお「虫めづる姫君」の『源氏物語』若紫取りについては、下鳥朝代「虫めづる姫君」と『源氏物語』北山の垣間見〔國語國文研究〕九四号、一九九三年七月に詳しい。

(3) 保立道久「娘の恋と従者たち——『粉川寺縁起』を読む」〔中世

の愛と従属 絵巻の中の肉体」平凡社、一九八六年二月）、拙稿「『紅の袴』の表象するもの——『堤中納言物語』「虫めづる姫君」の「白き袴」序説——」（『中世王朝物語の新展望 時代と作品』（花鳥社、二〇二三年刊行予定）。

(4) 本文の引用や頁数は、以下に拠る。

・『源氏物語』『無名草子』『今とりかへばや』『建礼門院右京大夫集』：新編日本古典文学全集（小学館）。

・延慶本『平家物語』：『延慶本平家物語』（勉誠社）。

(5) 斎藤慎一「二つ衣」と「白き袴——小宰相と能登殿——」（『古典教室』七号、一九七四年六月）。

(6) 注(3)の拙稿を参照のこと。

(7) 注(1)玉井・野村論文、注(5)斎藤論文、柳井愛梨彩「『平家物語』「小宰相身投」における「白袴」の象徴性——延慶本『平家物語』を中心に——」（『國學院大學大学院文学研究科論集』四三三号、二〇一六年三月）。

(8) 後藤丹治「平家物語の諸問題」（『国文学論叢第二輯 中世文学 研究と資料』至文堂、一九五八年二月）のように、『平家物語』小宰相入水譚は『源氏物語』浮舟の他に、『保元物語』源為義北の方との関連や、『狭衣物語』飛鳥井の女君からの引用に関する言及も古くからある。本稿で詳述する余裕はないものの、特に『狭衣物語』については延慶本の小宰相が最後に、身重でありながら一人の男への愛に殉じた飛鳥井の女君の物語に寄り添いながら入水を決行しようとしたことも看過できない。

(9) 『源氏物語』と『平家物語』当該部分の研究史と解釈については、井野葉子「浮舟物語の研究史と課題」（『源氏物語 宇治の言の葉』森話社、二〇一一年四月）と、『延慶本平家物語全注釈 第五本（巻

九）（汲古書院、二〇一五年一〇月）から多くを学んだ。

(10) 四重田陽美「『平家物語』小宰相身投への一視点」（『同志社国文学』五三号、二〇〇〇年二月）。四重田氏の「浮舟と小宰相は、山里と船の上、川への入水と海への入水、助かって出家と助からず海へ水葬といった、対比的な形で描かれている」との視点は、浮舟と小宰相の袴の色の対比構造に着目する本稿においても軽視できない。

(11) 横井孝「女人哀話考——小宰相と建礼門院と——」（『平家物語 説話と語り あなたが読む平家物語』有精堂、一九九四年一月）は、総角巻の宇治の大君とも重複することを指摘する。

(12) 佐伯真一「「ひとつはちす」考」（『青山語文』四二号、二〇一二年三月）は、現世で愛する人との「一蓮」への往生を願う場面で、『源氏物語』の語り手が光源氏に寄り添う以上に、『平家物語』の語り手が小宰相に好意的なのは、入水という逼迫した状況での切実な祈りゆえだと解釈する。

(13) 橋本ゆかり「『源氏物語』第三部における「衣」——変奏する（かぐや姫）たちと（女の生身）——」（『王朝文学と服飾・容飾 平安文学と隣接諸学9』竹林舎、二〇一〇年五月）は、生きながら死を迎える出家の儀式で「男の法衣」を着せられる浮舟の男装は、『法華経』第五卷「提婆達多品」にある「童女成仏」の、男の身に転じなければ成仏できない「変成男子」の思想を彷彿させ、かえって浮舟の、救われたい「女の生身」を際立たせていると述べる。小宰相が通盛の鎧を着せられて海の底へと葬られたことは『平家物語』諸本で共通するが、その中で南都異本は、小宰相の回向のために僧が『法華経』を誦誦するという独自内容を有しており、小宰相の沈んでいった大海に住む童女の五障を説いた箇所を殊更強調している。南都異本でも橋本氏の浮舟の「男の法衣」の分析と同様に、葬送の際

に鎧を着せられた小宰相の男装に着目し、その連想として「変成男子」による女人往生が呼び寄せられているように思われる。南都異本の当該箇所については、佐々木巧一「平家物語「南都異本」の性格(一)——「小宰相入水」譚に見られる法華信仰——」(『野洲国文学』三〇・三一合併号、一九八三年三月)に詳しい。

(14) 三田村雅子「浮舟物語の〈衣〉——贈与と放棄——」(『源氏物語 感覚の論理』有精堂、一九九六年三月)。

(15) 森岡常夫「平安朝物語の研究」(風間書房、一九六七年一〇月)。

(16) 林田孝和「贖罪の女君——源氏物語における浮舟物語の位置——」(『林田孝和著作集 第一巻 源氏物語の発想』武蔵野書院、二〇二一年五月)。

(17) 池田和臣「『源氏物語』の水脈——浮舟物語と『かばねたづぬる三宮』——」(『源氏物語 表現構造と水脈』武蔵野書院、二〇〇一年四月)。

(18) 『建礼門院右京大夫集』の贈答歌一六五・一六六番歌の詞書でも延慶本と同様に、通盛ではなく他の男と縁を結んでいけば、小宰相が海に身を投げて「底の藻屑」(八五頁)になることはなかったとの認識を示し、小宰相の悲劇を悼んでいる。

(19) 永井久美子「『平家物語』「小宰相身投」を読む——小宰相と通盛、その出会いの物語と『源氏物語』——」(『比較文学研究』一〇一号、二〇一六年六月)は、小宰相と通盛の馴れ初め譚を覚一本で読解しており、桜の時期の二人の出会いが若菜上巻の柏木による女三の宮のかいま見を意識していると指摘するが、少なくとも延慶本ではそのようには読めない。辛島正雄「中世王朝物語史論 下巻」(笠間書院、二〇〇一年九月)における『木幡の時雨』論で論証されるように、若菜上巻のかいま見を、男女の出会いの美的な一典型として引

用されるようになるのは、『源氏小鏡』成立前後まで下るだろう。小宰相のさすらいのきつかけとなる桜の時期のかいま見としては『源氏物語』花宴巻を、人目を気にして牛車から降り煩う小宰相の様子は『住吉物語』の嵯峨野の野遊びの場面における宮腹の姫君をモデルにしたものと考えられる。

(20) 注(12) 佐伯論文は、小宰相のおこないは子殺しの罪の他にも、入水間際に夫への恩愛を語るの「臨終正念の教えに抵触する」ことが想定されるにもかかわらず、『平家物語』の語り手が小宰相の言動を批判することは皆無だと指摘する。小宰相の語られぬ罪に関する考察は他に、高木信「〈貞女〉の檻——〈知〉にダブルバインドされた小宰相」(『死の美学化』)に抗する『平家物語』の語り方(青弓社、二〇〇九年三月)、大津雄一「残された女の物語——小宰相と曾我兄弟の母——」(『いくさと物語の中世』汲古書院、二〇一五年八月)がある。

(21) 注(20) 高木論文は、「忠臣」と並列される「貞女は二夫に交わらず」といった定型句や、妊婦の自死とその罪をめぐる言説の用例を提示し、妊娠した女性が死ぬことの罪障を「『平家物語』が無視し、享受者にも〈忘却〉させるような言述システムを構築している」ことに警鐘を鳴らす。夫の後世を弔うという常識から逸脱した、『平家物語』では例外的な小宰相の後追い自殺と「貞女」の規定について、先行研究を踏まえながら多角的に論じている。

(22) 山中耕作「小宰相——クグツの末裔たちの遊行唱導——」(『講座 日本伝承文学 第八巻 在地伝承の世界』西日本三弥井書店、二〇〇〇年三月)は、遊行唱導の巫現たちの女性への布教に、小宰相の物語が利用されたことを想定する。

(23) 『願成寺地藏尊縁起』については、浜畑圭吾「願成寺をめぐる二つ

の縁起」(『中世寺社の空間・テクスト・技芸「寺社園」のパスベ
クテイヴ」勉誠出版、二〇一四年七月)に詳しい。佐谷真人「法
然上人伝から古浄瑠璃『ほうねんき』へ」(『寺社縁起の文化学』森
話社、二〇〇五年一月)は、法然の事跡と小宰相の説話が結びつ
けられ、浄土宗の布教に利用されたことを、堤邦彦「いくさ語りか
ら怪談へ」(同上)は、そうした鎮魂説話が『宿直草』のような近世
の怪談の素材になったであろうことを述べる。

(24) 注(11) 横井論は、小宰相に寄り添う語り手について、生き残っ
た乳母子(もしくは乳母)の「語りの視点」を想定する。

(25) 『願成寺地藏尊縁起』の本文の引用は、須田学『願成寺地藏尊縁
起』翻刻・論考」(『古代中世文学論考 三集』新典社、一九九九年
一〇月)に拠る。

(26) 桐壺巻の当該場面の『源氏物語』諸本の異同と、『無名草子』にお
ける『源氏物語』の引用本文の検討については、三浦香『無名草子
の源氏物語論における源氏物語本文からの引用部分について』(『東
京成徳国文』八号、一九八五年三月)に詳しい。

(27) 松村誠一「浮舟——「らうたさ」と「心強さ」——」(『成蹊國文』
創刊号、一九六八年一月)。

(28) 延慶本で小町説話と共に引用される、女への恋の妄執によって男
が鬼と化す紺青鬼説話もまた、男が墮落したのは、男の気を惹きな
がらもその恋情に応えなかった女の落ち度とされ、その罪が問われ
る言説となっていることは、田中貴子「鬼にとり憑かれた〈悪女〉
染殿后と位争い」(『悪女伝説の秘密』角川書店、二〇〇二年九月)
に詳しい。また注(3) 拙稿で触れたように、実際に起きた事件を
『源氏物語』浮舟入水譚を踏まえながら脚色しているとおぼしき『今
昔物語集』巻二十九・第八話も、「紅の袴」姿の女が路上で無残に殺

害されたのは、男の懸想を受け入れなかった報いだと噂されている。
なお、高橋亨「存在感覚の思想——『浮舟』について」(『源氏物語
の対位法』東京大学出版会、一九八二年五月)で指摘されるように、
浮舟巻の浮舟もまた、句の宮を愛執の罪に惑わせたのみならず、従
者の自分(時方)にも虚言の罪を犯させるのだと、冗談めかして
とはいえ、「女こそ罪深うおはするものはあれ」(三四頁)と、男
の仏教的な罪の責任をなすりつけられている。

(29) 高橋亨「宇治物語時空論」(『源氏物語の対位法』東京大学出版会、
一九八二年五月)、日向一雅「浮舟について——「人形」の方法と主
題的意味——」(『源氏物語の主題「家」の遺志と宿世の物語の構
造』桜楓社、一九八三年五月)。

(30) 中田恵理子「すれ違う言葉の悲劇——「小宰相身投」における小
宰相の入水——」(『面』六号、二〇一二年一月)。

(31) 高木信「小宰相と小野小町との絆、あるいは男たちの〈欲望〉を
逆なでする——『平家物語』「小宰相身投」、室町時代物語、謡曲《卒
塔婆小町》」(『亡霊たちの中世』水声社、二〇二〇年三月)。小町説
話に関する参考文献など充実な内容で示唆に富む。

(32) 注(19) 永井論文。『源氏物語』の「心強し」全用例が表にまとめ
られていて至便。

(33) 羽山和美「『夜の寢覚』にみられる女君の成長——「心強き女性」
となりゆく過程——」(『日本文学論集』一七号、一九九三年三月)。
『今とりかへばや』が『夜の寢覚』の功罪を強く意識して作られたこ
とについては、拙稿「平安後期物語の宇宙」(『日本文学史 古代・
中世編』ミネルヴァ書房、二〇一三年五月)で解説したことがある。

(34) 西本寮子「『とりかへばや物語』の主人公——女性としての成長を
軸として——」(『国文学放』九八号、一九八三年六月)。伊達舞「『と

りかへばや』の女君・宰相中将と宇治の若君——親子関係の〈文〉」
〔『狭衣物語 文の空間』翰林書房、二〇一四年五月〕による批判もあるが、星山健「王朝物語史上における『今とりかへばや』——「心強き」女君の系譜、そして〈女の物語〉の終焉——」〔『王朝物語史論——引用の『源氏物語』——』笠間書院、二〇〇八年二月〕は、「心強さ」の語はまさに、王朝物語における女の生きがたさの歴史とともに存在するのである」との意見を示す。

(35) 安田真一「〈女〉の世界あるいは〈女〉の不幸——『今とりかへばや』四の君をめぐって——」〔『古代文学研究 第二次』四号、一九九五年一〇月〕など、安田氏は女中納言と相対する四の君を、「社会的規範に掬め取られた〈普通の女〉」と位置付ける。

(36) 西本寮子「演じ続ける女君——『今とりかへばや』における罪の問題——」〔『物語〈女と男〉 新物語研究3』(有精堂、一九九五年一月)、拙稿「『今とりかへばや』の女中納言——男女並立から導き出される〈女〉の罪と呪縛——」〔『跡見学園女子大学紀要』二六号、一九九八年三月〕を参照のこと。

(37) 安田真一「〈主体性〉を捏造する〈ことば〉と〈身体〉——『とりかへばや』の女君と宰相中将をめぐって——」〔『叢書 想像する平安文学 第3巻 言説の制度』勉誠出版、二〇〇一年五月〕。

(38) 神田龍身「とりかへばや物語」〔『神田龍身初期論文集』学習院大学、二〇二一年一月〕。

ばば じゅんこ 立教新座中学校・高等学校非常勤講師、
立教大学日本学研究所研究員